

『緋文字』について

山 本 皓 一

N. ホーソーンの文学においては悪、罪というテーマを抜きにして語ることはできない。『緋文字』（1850）においては adultery（姦通）という罪を扱っている。17世紀初期の政治、宗教、法律が一体化していた、かたくなな清教徒主義的な道徳が社会を支配していたマサチューセッツ植民地時代のボストンでの物語であり、『緋文字』が出版される約2世紀前（1645～1650）の出来事である。はるか年上の医師（ロジャー・チリングワース）と愛の伴わない形だけの結婚をした人妻（ヘスター・プリン）が夫（ロジャー）より一足さきにアムステルダムからボストンに来て2年後、将来有望な青年牧師（アーサー・ディムズデル）との情熱的な不倫関係におちいり、彼ら二人の間に生まれたパールという女の子の誕生によって姦通が発かくし、A（adulteryの頭文字）という緋文字を生涯上着の胸にぬいつけて追放者という社会的制裁を受けねばならなくなる。知事始め民衆からの追求にもかかわらず、ヘスターはがんとして相手の名前を明かさず、それどころか母性本能なのか、当時のピュリタニズムに対する反抗なのか、アーサーを守ろうとする。物語はヘスターが、罰として大衆の面前に緋文字Aを胸につけて、パールをAの文字に押しつけるように抱き、三時間処刑台の上でさらに者になる場面から始まる。その時消息不明であった夫のチリングワースが姿を現わしヘスターの不義の相手を蛇のようにしつようにつきとめようとする。一方ヘスターは罪をいさぎよく受け入れ、不幸な人々へ暖かい手をさしのべ、長い年月の後姦婦というイメージから聖母マリアのようなイメージへと変化して行く。それに対し、アーサーは牧師故になおさら、罪の重さに罪悪感に悩まされ、良心の呵責に苦しみ、心身ともに病魔に蝕ばれて行く。アーサーの主治医となったチリングワースは遂にヘスターの不義の共犯者がこの牧師であることをつきとめ、復讐の鬼と化し、復報の念に地獄の炎のごとく燃え、牧師を精神的にも肉体的にもおいつめて行く。このような憔悴した彼をみて、ヘスターは新天地での三人の幸福を得ようとするが、チリングワースにはばまれ、ディムズデルは三度目の処刑台の場面で公衆の面前で罪を告白し、悲劇的終焉を迎える⁽¹⁾。

この小説は女人主人公ヘスターと牧師アーサーとの熱情的な恋愛そのものの過程は一切描かれていない。にもかかわらず罪の物語であることは明らかである。特に男と女の間に起りえる道徳に反する罪である。しかしその死にも値いする罪も物語が始まる以前に犯されているのであ

（1）松村達雄・太田三郎共訳：『緋文字』（世界文学全集11、河出書房新社、1962）PP.468-9

り、孤独なヘスターと、心のよりどころとされアーサーへと激しい情熱の流れのプロセスを描いてあるのではなく、すでに犯された罪が前述の4人の主要人物にどのような影響がおよび、どのような結末をもたらすかというのがこの作品の主題といえるだろう。つまり、この物語は宗教的社会的に許されない姦通という罪を犯した罪人たちのその後の心理的影響と四人の主要人物にいか⁽²⁾に罪の意識が作用するかということを追求しているのである。この物語のテーマはホーソーンの小説のテーマの一つである罪であるが、この場合その罪は物語の始まる以前に犯されて⁽³⁾いて、その罪の結果が数人の人物の生活にくりひろげられて行くのである。その罪は姦通である。又リチャード・チェースによれば『緋文字』はいわゆる罪と悔悟の物語ということになるであろう。たしかにそういうこともできる。しかも悔悟の方に重点をおいた物語であるといえよう。しかしもっと正確に言えば、この小説の主題は罪の道徳的ならびに心理的な結果の物語である。ホーソーンがもしイギリス人であったならば『緋文字』という作品は生まれな⁽⁴⁾かったかもしれない。何故ならあの魔女狩りで有名なセイレムに生まれ、そしてその魔女狩りの時の判事を直系とする先祖を持ったという意識がこの作品となって表われたのである。それはまるで魔女狩りで迫害の役割を演じた彼自身の祖先の罪悪感をホーソーン自身の血肉の中に感じているかのようである。このようなエネルギーによって初期ニュー・イングランド植民地開拓者の子孫であるホーソーンは、厳格な清教的なものの考え方をした作風で終始したが、その考え方を芸術家の精神的に非人間的なものの見方とか、1690年代のセイラム魔女裁判で判事をつとめた直系の先祖から清教徒に対して罪の念でがんじがらめになった一箇の人間の道徳的にかくあらねばならぬとする考えでもって、探したのであった。その結果『七破風の屋敷』の序文で定義したロマンス（『緋文字』）へと⁽⁵⁾なっていた。ホーソーン自身『緋文字』の序文である「税関」で次のように述べている。この祖先は武人であり、立法者であり、裁判官であった。彼はモリス教会の中心人物であった。清教徒の特質を善悪ともにそなえていた。彼はクエーカー派の人々が証言しているように他宗派の迫害者であり、クエーカー宗派の一婦人に対して彼が行った苛酷な迫害条件を語りつた⁽⁶⁾てている。といっているようにホーソーンは過去の先祖達の犯した罪に対する後悔の念を表わすものとしてこの小説を書いたと思われる。つまり今までは女性が魔女というでまかせの罪をきせられて処刑されるという弱いものであったが、この小説では女の強さというものをヘスターという一人の女を通じて人々に訴えたのかもしれない。女の強さとはヘスターが最後まで生き残ることであるが、そういう意味ではヘスターはアメリカ小説に於けるヒロインの1人であると言えるだろう。チェース氏は言っている。「この作品を女権拡張論者の論文ではないかと尋ねる人があるかもしれませんが、あるいはそう言える

(2) 松村達雄・太田三郎共訳：世界文学全集11（河出書房新社、1962）P. 469

(3) R. E. スピラー：『アメリカ文学の展開』（北星堂、1957）P. 98

(4) R. チェース：「アメリカ小説とその伝統」（北星堂、1960）P. 104

(5) 英語研究：特集ナサニエル・ホーソーン（研究社、1964）P. 2

(6) 松村達雄・太田三郎共訳：世界文学全集11（河出書房新社、1962）P. 219

かもしれない。豊かな感受性と深遠な神秘は普通フェミニスト文字とは縁のないものであるが、この小説は不思議なほどの多様性に富んでいるからである。しかしヘスター・プリンは結局ジェームズの「ボストン人」に出て来るバーズアイ嬢のモデルとなったあの女性解放論者であるホーソーンの義妹エリザベス・ピーポディに似ているのではあるまいか。かつて、豊麗で熱情的な女であったヘスターは今は諦めと奉仕の生活を送る。彼女の生活は「激情と感情」からはなはだしく思想に向かったのである。⁽⁷⁾ この小説は女の勝利の物語かもしれない。ホーソーンはこの緋文字を書くことによって何を言わんとしたか前述したように4人の人物に姦通の結果とさらにそれは罪を犯したものは社会的な地位などにかかわらず、それ相応の償いをしなければならないということであろう。ホーソーンが描く罪の意識は罪惡そのものに対する信仰の立場からの解釈でもなければ分析でもないように思われる。⁽⁸⁾ 人間の罪と墜落の意識が歴史的に色濃く染みこんだ風土にあって心理的執念として罪の意識に執拗に固執したのであった。⁽⁹⁾ そういう点においては最後に罪の意識にたえかねて死んだ牧師ディムズデールにおいては特にホーソーンの罪の意識の心理的追求がよくあらわれている。ホーソーンは小泉氏の説によると「この主題を扱うに際してオランダの画家 Rembrandt のように明暗のくっきりとした対照を特色とする手法を用いた。つまり、いままで述べて来た四人（ヘスター・プリン、パール、チリングワース、アーサー・ディムズデール）の人物にのみ強烈な光を投げ他を暗い影の中に置くことによって「この罪の報いは死なり」という恐ろしい悲劇の夢幻性と象徴性とを深め、高めることに成巧したのである。」⁽¹⁰⁾ 又 H. メルヴルはホーソーン論の中で、ホーソーンがこの不思議な暗黒をただ一つ的手段として利用してその光影のうちに生みだす驚くべき効果をあげていると評している。⁽¹¹⁾ とスチュアート氏は述べている。この明暗の手法はいたるところにでてくる。ホーソーンはこの手段を上手に使って、この物語の中で自分の主張をよくだしている。一例をあげると清教主義の暗と恋愛の明、ディムズデールの死とヘスターの女の強さ、それにチリングワースの復讐の暗とパールの無邪気な明である。

ところでヘスターと彼との間の愛情が現在どんなものであるか、この作品のどこにもあらわされていないのである。どちらの側からも発せられる、はげしい男女の愛情の言葉もあまり見出だされない。ただ一ヶ所ヘスターがチリングワースの追求の手からディムズデールをヨーロッパに脱出させる相談をするためにディムズデールがインディアン部落を訪問した帰り途、森の中で会い、憔悴しきった牧師を両腕に抱きしめ、その頭を胸にしっかりと押あてる場合ではヘスターの情熱が世きを切ったようにどっと流れてくる。彼女は胸から呪わしい深紅の文字をとって、遠くの枯草の上になげすめて、汚辱と苦悩の重荷から解放された気持を味わうので

(7) R. チェース：「アメリカ小説とその伝統」（北星堂、1960）PP. 104-5

(8) 松村達雄・太田三郎共訳：世界文学全11（河出書房新社、1962）P. 472

(9) 同上書 P. 472

(10) 英語研究：特集ナサニエル・ホーソーン（研究社、1964）P. 9

(11) R. スチュアート：「アメリカ文学とキリスト教」（北星堂、1958）P. 97

⁽¹²⁾ある。一方ディムズデールは最後には罪の報いは死なりというキリスト教の掟によって、罪を隠匿しようとするために一步一步と地獄の火に身を近づけてゆくのである。⁽¹³⁾

しかしヘスターは情熱あふれるロマンチックな女主人公すばらしいヒロインである。これまで非常に讃讃されて来ているが当然である。みごとに刺しゅうされたAの文字は現在の讃美者から「勇気の赤い表象と」呼ばれている。彼女は全く勇気があり、強かった。それに比較してアーサーは、あわれなほど弱々しくみえる。「ここに아가っておいで、ヘスターね！あなたとパールちゃんと」ディムズデール牧師は言った。「あなたたち二人ともいつか、ここに立っていた。でも私はいつしよではなかった。ここに上がっていらっしゃい、もう一度ね！私達三人でいつしよに立っていようね」ヘスターはだまって、段を登りパールの手をとって台の上に立った。牧師はパールのもう一方の手をもとめ、それをにぎりしめた。握った瞬間あらたな生命のはげしい流れが自分の生命とはちがった生命が彼の心臓へ激流のように流れ込み、彼のすべての血管をかけぬけるように思えた。まるでこの母親と娘とが生命の暖かみを彼の半ば麻痺する身体へとうつし入れているかのように。三人は電流の通ずる一つの鎖となっていた。⁽¹⁴⁾

ここに引用したのは作品の半ば「12章」、牧師と母、娘の人目を忍ぶ会合の場面であるが新しい生命の奔流も人々に罪を告白するところまで牧師を踏み切らすことはできない。牧師のもつ社会的な名声を聖職のもつ義務が溝となって最後まで彼ら三人を一本の鎖にすることはできなかったのである。そして最終場面で、自分の犯した罪に苦しみそして遂には「私たちの破った掟！－ここであれほど恐ろしくも暴露された罪！こういうものだけ、おまえは頭に入れておくれ！私は心配だ！心配になるよ！おそらく僕達が神を忘れた時－お互いの魂にいだく尊敬心を失った時に、－それから以後は永遠につづく、純潔な契りを結んで、これから後はまた相会うことを希望できなくなったのだ。神は一切を御存じだ。そして神は慈悲深い！とくに僕の苦しみの中に神は慈悲の心を明らかにしたもうた。この焼けつく苦痛を僕の胸で堪えしのぶようにと与えたもうた。この苦痛をいつも真っ赤に熱しておくようにとあの陰險な恐ろしい老人をつかわされることによって！人々の前でこの誇らしい汚辱の死をうるためにここに僕を連れて来て下さった！もしこういう苦悩のどれでも欠けていたら僕の魂は永久に失われていったことだろう！神のみ名よ、讃えられてあれかし！神のみ心は実現されるであろう。さようなら。」⁽¹⁵⁾

と絶叫してディムズデールは息たえるのである。そしてその死によってこの牧師の罪の償いをしたのである。そしてこの小説はディムズデールの死という悲劇的終末に終わるのである。しかしこの彼の言葉の中に自分が牧師として清教主義をおしすすめて行く役目にありながらそれにそむいたことに対して、如何に悩み苦しんだかがわかると思う。牧師の世の中に秘められた罪もヘスターの世に暴露された罪も所詮その本質は異ならないのである。ヘスターはいさぎ

(12) 英語研究：特集ナサニエル・ホーソーン（研究社、1964）P. 10

(13) 同上書 P. 10

(14) 松村達・太田三郎共訳：世界文学全集11（河出書房新社、1962）P. 346

(15) 同上書、P. 441

よく罪の報いを身に負うことにより、社会的処理をはるかに超越した世界に入り、貧しい者、悩める者への奉仕の生活を送るようになって、汚辱のシンボルであった緋文字 A を "Angel" の A に変えてしまうのである。⁽¹⁶⁾

そこでホーソーンはこの緋文字の中で罪というものを表現するためにヘスターという人妻とディムズデルという牧師を登上させることによって罪の恐ろしさを表現したかったのである。R. E. スピラーは「この物語の主要な人物であるヘスター・プリンとその愛人アーサー・ディムズデルの牧師はホーソーンの思索の額縁から抜け出して生きた人間になった最初の人物である。」⁽¹⁷⁾と論じているが当を得ていると思われる。ここでチェースの説を述べることによって以上の説がもっとはっきりとするとと思われる。

彼の説は「次に D. H. ローレンスの緋文字に関する見解であるが、これもウィンターズの見解と同様一部の真理を述べているようである。ローレンスの見解はホーソーンは意識的かそれとも無意識的にか、旧世界から新世界の移行にあって生ずる大きな文化的変化について一種の神話的予言を書いていると主張するのである。すなわち、ホーソーンはチリングワースと若い目のヘスターをかりて豊かな情熱をもった家長制にもとづく貴族社会の没落を描きまたディムズデルと事件後の「社会奉仕的」なヘスターによって新しい清教的デモクラシーの意識の出現を描いたのであるとローレンスは考えているように思われる。またこの意識は幼いパールによって示唆されているように深い自己矛盾を蔵した意識であると考えた。というのはパールは清教徒的アメリカやホーソーン自身と同様に表面ではおとなしくお上品であるが内部においては野性に充ちた魔力をもった存在であるからである。」⁽¹⁸⁾

チリングワース、ディムズデルおよびパールはこの作家の精神の色々異なった能力の統影であって、チリングワースは探究的な知性、ディムズデルは道徳的感受性、パールは無意識なあるいは霊妙な詩的才能と考えられよう。又ヘスターは作家の目に映った誤り易い人間の現実—柔軟で変わり易く、不屈で忍耐強く道徳的には一方的に決しがたい人間の現実を表すものである。⁽¹⁹⁾

特にチリングワースとディムズデルに関しては、チェースは「この小説はどの点に於いても作者ホーソーン自身の精神を写す鏡である。」⁽²⁰⁾と言っている。

スピラーは「作者ホーソーンはその罪の永遠の償いとして緋文字 (Adultery の頭文字) を胸に縫いつけることを要求している清教徒社会、絶対的倫理に同調しているのではない。」⁽²¹⁾と論述しているがこの説に全面に同調できないようだ。つまりホーソーンはこの小説を書くことによ

(16) 英語研究 (研究社、1964) PP. 9-10

(17) R. E. スピラー：「アメリカ文学の展開」(北星堂、1957) P. 98

(18) R. チェース：「アメリカ小説とその伝統」(北星堂、1960) P. 108

(19) 同上書、P. 113

(20) 同上書、P. 101

(21) R. E. スピラー：「アメリカ文学の展開」(北星堂、1957) P. 98

って、さきに述べた「罪の報いは死なり」というようにキリスト教にそむくことがいかに恐ろしいかを主張しているのではないか。しかしホーソーンはキリスト教の厳しさを表しながらも、キリスト教の寛大さ、つまり罪を犯した人でも、その罪の償いをすれば最後には救われるともいっている。しかしそれでも罪の償いをすれば民衆の心からは消えるだろうが、罪を犯した者はいつまでも苦しまねばならないのである。それはスピラーが「一層高いほとんど異教徒的な道德水準（ホーソーンは本能的にこれを支持しているらしく思われる。）に立つヘスターは絶えず公衆の目前で罪を告白することによって神を怖れるこの清教徒たちに見られないような純潔力を感じているのである。」⁽²²⁾と主張しているようにヘスターは最後には人に悪く思われるどころか逆にまるで天使のように思われるようになった。

「アーサーは公平に扱われていないと思う。アーサーな立場はヘスターよりもはるかに困難であった。彼女の闘いは外部的であった。胸の中は完全に統合されていたので決然と外の不寛容な社会に立ち向かうことができた。こういう戦いはおのずから気持ちをふるいたせた他毅然たらしめることができる。しかしアーサーの方がもっと英雄的であったと評価されねばならない。というのはヘスターは公衆の面前での告白がアーサーに払われた血と汗と苦悶の十分の一にあたるような苦しみも味わわなかったからである。」⁽²³⁾

上記の文の中でスチュアートはヘスターは外部的戦いであり、ディムズデルは内部的戦いであるといっているが、この場合ヘスターも外部的又内部的戦いであるとはいえないか。しかしアーサーは公平に扱われていないとの説には同意できよう。なぜなら「罪の報いは死なり」ということから考えてみるなら少し矛盾していることがあるように思われる。それは姦通という罪を犯した共同者（共犯者）であるヘスターは死という罪を受けていないということである。

当然の結果としてディムズデルと同様な罪を受けねばならないはずである。ヘスターは死という肉体的な罪でなくて精神的な罪をうけたのである。それは夫がありながら他人と姦通をしたという二度とぬぐいさることのできぬ心の苦しみや世間からの冷たい目という罰を受けたのであった。このヘスターの苦しみをホーソーンは本文で次のように述べている。

「Oftentimes, she could scarcely refrain, get always did refrain, from covering the symbol with her hand. But then, again, an accustomed eye had likewise its own anguish to inflict. Its cool stare of familiarity was intolerable. From first to last, in short, Hester Prynne had always this dreadful agony in feeling a human eye upon the token」⁽²⁴⁾

「何でも罪の象徴を手でおおわないではいられないほどであった。しかしヘスターは実際にはおおいにくさないでいいのだ。それから又よく知っている人の目も依然としてそれなりに苦悩をあたえていた。知ってる人の冷ややかな視線は堪えがたかった。初めから終わりまで簡

(22) R. E. スピラー：「アメリカ文の展開」（北星堂、1957）P. 98

(23) R. スチュアート：「アメリカ文学とキリスト教」（北星堂、1958）P. 112

(24) *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1963) P. 86

単に言えば罪の印の上に人間の目を感じる時ヘスター・プリンはいつもこの恐ろしい苦しみを味わっていたのであった。⁽²⁵⁾」

ヘスターは後には人々から尊敬されるようになったがヘスターについてスチュアートは「ヘスターは気高い望みの挫折した哀愁の人物である。しかしその心は安定していたから悲劇の人物ではない。彼女に対しては帽子をぬぎできるだけ高くうちふって挨拶する。ワーズワスのつぎの言葉が美しく彼女にあてはまる―「警告し、なぐさめ、命令するようにと気高くも神につくられた完全な女。」⁽²⁶⁾」と評している。

すなわち過ちを犯し易いけれども人の心を動かす哀愁と耐え忍ぶ力をもっと同時に女王然とした傲慢さと野蛮的なはげしいものを持ったヘスター・プリンは永遠の女、否おそらくは永遠の人間性を表わしている。つまりヘスターはなかなかの女つまり意志の強いそして又はあらゆる困難にたえるだけの心を持ち、またヘスターは力ある女で―ある眼のある評論家が呼んだように「実にみごとな女」⁽²⁷⁾であった。

ホーソーンがなぜこの二人の犯した罪の過程を書かずにその結果から書いたからという罪の恐ろしさを一層強く人々の心に訴えるためであろう。もし罪を犯す前から書くと人々の同情を集めることもあり、それだけ緊迫感というものが薄くなるのでキリスト教の掟を破る以前を秘密にすることによって罪の大きさを暗示したのでであろう。ヘスターとディムズデルが本当に罪を犯したのだろうかという疑問に対するこの二人の心の内は次の文章によくでている。

「May God forgive us both ! We are not, Heater, the worst ainner in the world. There is one worse than even the polluted priest ! That old mam's revenge has been blacker than my sin. He has violated, in cold blood, the sanctity of a human heart. Thou and I, Hester, never did so ! 」

“Never, Never!” whispered she, “what we did had a consecration of its own, we felt it so ! We said so to each other ! Hast thou fotgotten it ? ”⁽²⁸⁾」

「神さま、我々二人を許して下さい！ねえヘスターぼくたちは世界中で最悪の罪人じゃないよ。心の汚れた牧師よりずっと悪い人間がいる。あの老人の復讐は僕の罪よりももっと邪悪なんだ。あの男は人間の心の神聖さを冷然と犯したんだ。ヘスターおまえと僕はそんな真似はしなかった！」「決して決して！」と彼女はささやいた。「我々のしたことは他にはない神聖なものがあったのです。我々はお互いにそういう感じを持っていました。そうしてお互いにそい言い合っていたはずです。お忘れになって？」⁽²⁹⁾」ホーソーンによれば真の罪惡とは世の掟や法律を破ることではなく魂の真実、真理を昌洩することである。「チリングワースは知力と意志を兼ね具之恐ろしい下心をもって冷然としてディムズデルを分析するが、これはホーソーンの

(25) 松村達雄・太田三郎共訳：『緋文字』（世界文学全集11、河出書房新社、1962）P. 287

(26) R. スチュアート：『アメリカ文学とキリスト教』（北星堂、1958）P. 112

(27) 同上書、P.108

(28) *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1968) P. 195

(29) 松村達雄・太田三郎共訳：『緋文字』（世界文学全集11、河出書房新社、1962）PP. 385-6

意見にあると真の悪魔的な行為であって彼のいわゆる許しがたい罪である。⁽³⁰⁾」というチェースの意見には頷けると思います。ヘスターは自分の周囲の堅固な清教徒社会に対して公然たる半反逆となりそれに挑戦するほどの戦闘的な女ではないと思われる。しかし彼女はまた自分の情熱の行為を悔いてただ頭をうなだれて、内政し果たしてるほど弱い女ではなかった。彼女は自分の頭で思考し、行動し、悪魔的な不義の子パールの教育と慈善に活路を見出した。⁽³¹⁾ 清教徒社会の道徳的な枠を踏破って厚い人間的な情熱をほとばらせたスターをホーソーンはあたたかい同情をもって描いていることは彼女が作品の中でその情熱を美しさによって他のすべての人物を圧倒し去っていることは否定できないだろう。だから彼女は尊敬されるようになったのである。それは次の言葉でもわかるだろう。

「The letter was the symbol of calling. Such helpfulness was found in her, — so much power to do, and power to sympathize, — that many people refused to interpret the scarlet A by its original signification. They said that it meant Able⁽³²⁾」

「Aという文字は彼女の職務の象徴であった。彼女は実行力が強く同情心に富み、有能な女であるとわかってきたので緋色のAを本来の意義で説明しない人々が沢山できた。AはAble（有能）の意味だと彼らは称した。⁽³³⁾」と人々に言われたにもかかわらずヘスターは18章の中で過去をわすれてしまうのである。そうすることによって罪から免れようとしたのであった。しかし捨てたからといって彼女は犯した罪からのがれられたわけではなく、罪の痕跡は依然として心の中に残っているのである。彼女がこの文字を捨てたのは罪に対するロマンチックな反抗であった。そして彼女が文字をもとどうりにつけなおしたのは清教主義の規則をしかたなく受け入れたのであって本心から清教主義の厳しさを全面的に認めたのでわない。スチュアートが「ヘスターが文字を取り棄てたのは彼女のロマンチックな反逆であった。彼女が文字を元通りにつけたのはピューリタンの律法に外的に服従（内面的受け入れたのではない）した⁽³⁴⁾」ことである。」と言っているのはうなずけよう。

前にも述べたようにホーソーンはこの小説で罪を書こうとした理由は明白なことであるが、もう少し深く考えてみるとこの小説はホーソーン時代の社会的精神的批判をしたのではないと思われる。しかしこの小説はきっともめて考えてみると結局はピューリタンの頑迷な不寛大さの現われではないだろうか。と同時に清教主義の批判でもあると思われる。彼女の罪に対する勝利は生々しいヒューマニズムの勝利である。そして彼女が生きぬいたことはこの小説が17世紀清教徒社会に対する痛烈な批判となったと言えよう。

この小説においては森が罪の一つの要素、媒体となっているようである。悪の象徴である森

(30) R. チェース：「アメリカ小説とその伝統」（北星堂、1960）PP. 111-2

(31) 英語研究（研究社、1967）P. 200

(32) *The Scarlet Letter*（Ohio State University Press, 1968）P. 161

(33) 刈田元司訳：「緋文字」（旺文社、1967）P. 200

(34) R. スチュアート：「アメリカ文学とキリスト教」（北星堂、1958）P. 110

の中でアーサーとヘスターは悪いこととは知りながら二人の最も幸福な時を過ごしたのである。そしてこの森の清教主義社会と彼ら二人のロマンスの庭園とのしきりであった。森のシーン（おそらく一番印象の豊富な場面）を通じてヘスターはロマンチックな個人主義を現わし、アーサーは法律と良心の要求を表している。「我々は緋文字 A が表すものを比較的是っきりと示すことができる。すなわちそれは姦通を表すか、それとも（ホーソーンの関心を引いたのは姦通そのものではないので）「あざ」という短編に出てくる人間の手の象徴と同じくあらゆる人生に出てくる免れがたい、けがれを表すとも言ってよい。」とチェースは言っている。この場合緋文字 A は姦通を表し「あざ」にでてくる人間の手の象徴と同じようにあらゆる人生に於いて免れがたいけがれを示している。緋文字 A はさきの森と同様、悪の象徴である。ホーソーンは 18 章「あふれる日光」のなかで「The scarlet letter was her passport into regions where other women dared not tread. Shame, Despair, Solitude ! These had been her teachers – stern and wild ones, – and they had made her strong, but taught her much amiss⁽³⁵⁾」

「緋文字 A は他の女性が踏み込む度胸のないところでも彼女を入れてくれるパスポートであった。恥辱、絶望、孤独！こういうものが彼女の教師－厳しい、激しい教師であった。そして彼女を強くしてくれたが、しかし非常に誤った教えを与えたのである。」⁽³⁶⁾

といているように恥辱、絶望、孤独といったものが原因になって、姦通という罪を象徴しているようだ。とは言え、A という文字はヘスターの人間性、善行等によって、彼女に罪（悪）のイメージを失わせ、善のイメージへの変化させる不思議な力（魔法の力）を帯びさせたのだった。

「the scarlet letter had the effect of the cross on a nun's bosom. It imparted to the wearer a kind of sacredness, which enabled her to walk securely amid all peril⁽³⁷⁾。」

「例の緋文字には修道女の胸の十字架のような効果があった。それはそれを身につけている人に一種の神聖さを与え、そのために彼女はあらゆる危険の中を安全に歩くことができるのだ⁽³⁸⁾った。」

ヘスターが最後には人々からは天使のように思われ、さきに述べたように、A は Abel の意味だと思われるようになるが、一度犯した罪のけがれというのは、いつまでもぬぐいさることのできないものである。

幼女パールは緋文字 A の永遠の表現つまり罪の永遠の表現のように思える。

スチュアートは「ここで小さなパールは（ロマンチックな意味で）自然の子となり森の生きものたちから認められるので森は自然の無邪気をもあらわしている。パール自身も二重である。

(35) R. チェース：「アメリカ小説とその伝説」（北星堂、1960）P. 115

(36) *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1968) PP. 199-200

(37) 松村達雄・太田三郎共訳：「緋文字」（河出書房新社、1962）P. 390

(38) *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1968) P. 163

(39) 刈田元司訳：「緋文字」（旺文社、1967）P. 202

彼女は無邪気な自然の子であるばかりでなく同時に因果応報の代理者でもある。⁽⁴⁰⁾と論じている。

読者の目にまずふれる少女パールは、はつらつとした真に生きたる子供であるが、これは作者の幼い娘（ユーナ）をモデルにして描いたからかもしれない。パールは現実の生活においても又象徴としてもヘスターの生みの子であって作者が言っているように緋文字Aの延長である。

そして、別の見方をすればこのAはパールという子供へとつながっていくのである。緋文字Aはヘスターが死ぬことによって地上からは表面上はなくなるかもしれないが、しかし民衆の間には永遠になくならないのである。つまりパールがいつまでもAの化身としてひきついで行くのである。D・H・ロレンスが「ヘスタのおびえたものはおのれの罪から生まれたもの、つまりパールだけであった。パール、それは緋文字の化身なのだ。」⁽⁴¹⁾と述べているように、まさにAの化身であると思われる。もしパールという子供がうまれなかったならばヘスターとディムズデルとの密通もわからなかったであろうし、そして最後には一緒になれたかもしれない。だからそうなったとしても、この二人は一生苦しんだことはまちがいない。次にD・H・ロレンスの言葉を挙げておきたいと思う。

「ヘスターやアーサー・ディムズデルの場合、罪は彼らがいけないと考えたことをしたが故に罪であった。彼らが本当に恋人同志せいたいと思ったとしたら又もし彼らが自分たちの情熱に真摯な勇気をもっていたとしたら罪などなかったであろう。たとへその欲求が一時的なものにすぎなかったとしても、ただ罪がなかったとしたら彼らはこの勝負の醍醐味を半分あるいはそれ以上も失っていただろうし、彼らは自分自身が悪いことだと信じていたことをするという、そこに行為の主要な魅力があった。」⁽⁴²⁾この言葉の中に人間の罪からのがれようとする人間の気持ちがでていようだ。

D・H・ロレンスが言っているようにヘスターとディムズデルが勇気をもって恋愛をしたならば罪というものは彼ら二人の上にふりかかってこなかっただろう。彼らがいけないと思いながら隠れて姦通をやったが故に世間からは清教主義違反者としてみられたのであると思う。又ロレンスが「罪がなかったならば、子の勝負の醍醐味を半分以上も失っていただろう。彼ら自身が悪いことだと信じていたことをするということこそ、そこに行為の主要な魅力があった。」⁽⁴³⁾という言葉はこの小説は清教主義に反した罪の物語であるということを裏書している。というのは姦通という罪がなかったならば、この小説全体が非常に機械的な深みのない作品になってしまう。すなわちパールという少女が生まれなかったならば、ただの一般的な恋愛小説になってしまう。パールの存在のよってこの小説がピュリタニズムに反する作品であることを示していると思われる。

(40) R. スチュアート：「アメリカ文学とキリスト教」（北星堂、1958）P. 110

(41) D.H. ロレンス：「アメリカ古典文学研究」（表現社、1962）P. 135

(42) 同上書、P. 141

(43) 同上書、P. 141

『緋文字』について

参 考 文 献

Nathaniel Hawthorne: Critical Assessments Vol. 1～4

H. H. Waggoner: Hawthorne.

R. R. Male: Hawthorne's Tragic Vision.

H. James: Hawthorne.

坂本重武：ホーソーンの文学（泰文堂）

大井浩二：ホーソン論（南雲堂）

鈴木重吉：鏡と影（研究社）

酒本雅之：ホーソン（冬樹社）

V. O. A. 編：アメリカ小説論（北星堂）

ミネソタ大学編：アメリカ文学作家シリーズ
第5巻（北星堂）